

「校長室の秘密」

子ども達のはしやぐ声と彩香先生の大きな声が校長室まで聞こえてきます。校長先生は二年一組の様子が気になってしかたがありません。彩香先生は、大学を出たばかりの先生一年生です。

校長先生は、教室を見に行きました。廊下まで、子どもたちの声があふれています。

「静かにしてください」

彩香先生が注意してもいつこうに静かになる様子がありません。それでも、彩香先生は一生懸命授業を進めています。校長先生は子ども

もたちの動きを困った顔で見えました。特に心配していたのは
にねんせい てんこう
二年生になって転校してきたゆうこちゃんのことです。まだ、この
がっこう やす じかん ひとり
学校になれてなくて休み時間も一人でいることが多かったからです。
やはり、おどおどして席に座っているように見えます。

「わかりましたか」

と、彩香先生あやかせんせいがみんなに問いかけると

「わかりませーん」

「ぼくもぜんぜんわかりませーん」

「もう一度お願いします」

と、やはりあの目立ちたがりの三人組さんにんぐみです。

たかしとひろかずとゆうたです。二年生に進級して本領を發揮し
始めたようです。

「あ、校長先生だ」

と、一番ウーマターのたかしが校長先生を見つけて叫びました。
子ども達の視線が一斉に校長先生に向けられました。悪いところを
見られてしまったような顔が並んでいます。

「静かにシレー」

と、最も騒いでいたひろかずが皆に声をかけました。校長先生の
登場に一番びっくりした顔をしていたのは彩香先生かもしれません。
先生になってまだ一ヶ月余りです。赴任式の時に彩香先生が緊張

した顔で『右も左もわかりませんが一生懸命頑張りますのでよろしくお願いします』と言った時『この先生、右も左もわからなくてよー。何もわからないんだー』とひろかずがびっくりした表情だったのを校長先生は思い出してつい一人笑いしながら廊下を通り過ぎました。後ろの方から、また子どもたちのざわめきが聞こえてきます。『彩香先生頑張れ』とエールを送りながら校長室にもどりました。休み時間になって校長室のドアがノックされました。ドアを開けて入ってきたのは彩香先生です。後ろには、あの三人組が立っていました。

「校長先生、何とかしてください。もう私はどうしていいかわか

りません」

「どうしたんですか。この子^こたちが何か^{なに}やらかしたんですか」

「何を^{なに}やったのか、校長先生^{こうちようせんせい}にお話^{はな}してごらん」

彩香先生^{あやかせんせい}が三人組^{さんにんぐみ}をにらみながら言^いいました。

三人^{さんにん}ともだまつたままです。

「校長先生^{こうちようせんせい}聞いてください。この子^こたちは転入生^{てんにゅうせい}のゆうこちゃん

をいじめて泣^なかしてしまつたんですよ」

彩香先生^{あやかせんせい}が訴^{うった}えるように言^いいました。

「転校^{てんこう}してきた女^{おんな}の子^こをいじめるのはよくありませんねー」

校長先生^{こうちようせんせい}は、今日^{きょう}こそはこの子^こたちを許^{ゆる}してはいけないと思^{おも}いま

した。

「校長先生こうちようせんせいが一番嫌いちばんきらいなことは、弱よわいものをいじめることです。

それはとても恥はずかしいことですよ。ゆうこちゃんに何なにをしたんです

か」

三人さんにんは唇くちびるを噛かみしめてうつむいています。

「この子こたち大変たいへんなことをやったのです」

と図工ずこうの時間じかんに起おこった出来事できごとを彩香先生あやかせんせいが話はなし始はじめました。父ちちの

日ひに向けてお父とうさんの絵えを描かいていた時ときのことです。突然とつぜん、ひろかず

君くんがゆうこちゃんの画用紙がようしを取り上あげて二ふたつに引ひき裂さいただけでなく、

筆洗ふであらい用の水ようみずをゆうこちゃんにぶっつけたそうです。たかしやゆうた

も仲間なになつて水みずを浴あびせて教室きょうしつの床ゆかが水浸みずびたしになつたことを、泣なき出しだそんな変へんな顔かおで彩香先生あやかせんせいは校長先生こうちようせんせいに話はなしました。

「うーん、これは大變たいへんなことをしましたね」

校長先生こうちようせんせいは、怒おこつたようこまな、困こまつたようかおな顔いで言いいました。でも、

この三人さんにんがいじめようとしてやこまつたとは校長先生こうちようせんせいにはどうおもしても思おもえませんでした。

「彩香先生あやかせんせい、この三人さんにんからゆはなしつくり話きを聞ききたいので校長室こうちようしつで預あずかつていいですか」

と校長先生こうちようせんせいが言いうと、彩香先生あやかせんせいは出でて行いきました。残のこされた三人さんにんは応接室おうせつしつのソファあんないーに案内あんないされました。

「ゆうこちゃんに水をかけたと言うのは本当ですか」
校長先生は、ゆつくりと優しい声で聞きました。

「うん」

と、三人は同時にうなずきました。

「それは、悪いことをしたと思いますか」

校長先生は、さらに優しい声で聞きました。

今度は、三人で顔を見合わせた後に

「ううん」

と、首を横に振りしました。

「そうか、悪いことをしたとは思ってないんだね」

三人は、首をたてにふりました。

「校長先生には、水をかけるなんて良いことをしたとは思えないんだがどうしてなの」

「それは、言えません」

とひろかずが言う

「うん、それは言ってはだめなことです」

と、たかしもきつぱりと言いました。

「口が裂けても言えません」

と大人びた顔でゆうたも続いて言いました。

「そうか、校長先生にも言えないことなんだね。きつと言えない

事情じじょうがあるんでしよう。ところで、この画用紙がようしはどうしたんだね。こ

んなに破やぶいてしまつては、ゆうこちゃんも困こまつたでしようね」

校長先生こうちようせんせいは、破やぶけた画用紙がようしを見つめながら尋たずねました。

三人さんにんは相変あいかわらずだまつたままです。

「破やぶいた理由りゆうがあると思おもいますよ。どうして破やぶいてしまつたんです

か」

「それも、言いえません」

と初はじめにひろかずが答こたえると

「うん、それは言いつてはだめだと思おもいます」

今度こんども、たかしがきつぱりと言い

「口くちが裂さけても言いえません」

と大人おとなびた顔かおでゆうたも続つづいて言いいました。

校長先生こうちようせんせいは、しばらく三人さんにんの目めを交こうご互ごに見みつめました。ひろかず

もたかしもゆうたも校長先生こうちようせんせいをしみっかり見みつめていました。この子こ達たちは悪わるいことはしていないと校長先生こうちようせんせいは確かく信しんしました。

「わかりました。あなた達たちを信しんじましょう。教室きょうしつに戻もどっていいですよ」

校長先生こうちようせんせいは、笑えが顔おで三人さんにんを見み送おくりました。

三人さんにんが教室きょうしつに戻もどり、しばらくすると校長室こうちようしつのドアがノックされました。中なかに入はいってきたのは彩香先生あやかせんせいと保健室ほけんしつで着替きがえを終おえたゆうこ

ちゃんです。

「ゆうこちゃん。だいじょうぶですか」

校長先生こうちようせんせいが尋ねるとゆうこちいちゃんは小さくうなずきました。

「どうして、ひろかず君くんが画用紙がようしを破やぶいてしまったのか言いってごらん」

先生せんせいに促うながされてゆうこちゃんうなが話はなし始はじめました。

「私わたし、困こまっていました。お父とうさんの絵えを描かきたくなかったからかあです。この学校がっこうに転校てんこうしてきたのはお父とうさんとお母かあさんが離婚りこんしたからかあです。お母かあさんは、お父とうさんの写真しゃしんもぜんぶ捨すてちゃって、よしがんばるぞーと気合きあいがはいっているんです」

「そうか、ゆうこちゃんはお母さんをおうえんしたいんだね。二人
でこれから頑張っていくんだからお父さんはいららないんだね」

ゆうこちゃんはうなずいて、話を続けました。

「きつと、ひろかず君は私の困っているのを見かねて助けたかつ
たんだと思います。だから、画用紙を破いちやつたんです。この前
『僕もお父さんいないんだよ。へっちゃらだよね』と、言ってくれま
した。きつとへっちゃらなんかじやないと思います。だって、ひろか
君も画用紙を前にして困っていたのを私はしっています」

「なぜ、水をかけてきたかもお話しして」

彩香先生が優しく促しました。

「私わたし、あの時ときおもらししてしまっただけです。どうしていいかわからず泣なき出だしてしまいました。すると、ひろかず君くんが筆洗ふであらいの水みずを私わたしにぶっかけてきたのです。きっと、お漏もらししたことを隠かくそうと
したんだと思おもいます。だから、ひろかずくんたちを叱しからないでくださ
い」

ゆうこちゃんなみだは涙なみだを浮うかべて言いいました。

「よくお話はなししてくれましたね」

と、校長先生こうちようせんせいが頭あたまをやさしくなでた時とき

「あつ、ひろかず君くんとたかし君くんとゆうた君くんだ」

ゆうこちゃんが声こえをあげました。校長室こうちようしつの窓辺まどべから三人さんにんが顔かおを覗のぞ

かせていました。

「はいつておいで」

と校長先生こうちようせんせいが手招きてまねすると三人さんにんは、素直すなおに校長室こうちようしつに入はいって来きました。

「ごめんね、ひろかず君くん」

と言いいながら、彩香先生あやかせんせいが突然とつぜんだっこしました。

「いやだ、恥はずかしい」

と言いいながらもひろかず君くんはおとなしくしていました。

「おもらししたことひみつだよ」

彩香先生あやかせんせいが言いうと



「先生せんせいにだっこされたこともひみつだぞ」

ひろかず君くんが口をとんがらせて言いいました。

「そうだね。これは校長室こうちょうしつの秘密ひみつにしよう」

と校長先生こうちょうせんせいが右手みぎてを出だしました。その上うえに彩香先生あやかせんせいの手てと、ゆう

こちやんとひろかず君くんとたかし君くんとゆうた君くんの手てが重かさなり校長室こうちょうしつの

秘密ひみつが成立せいりつしました。

(金城きんじょう 毅つよし)

「あおぞら将棋クラブ」

はあー。

ため息いきをつきながら、僕は学校帰りの道みちをとぼとぼあると歩いていった。

“たつお君くんはいいなあ。何をなにやっても上手じょうずだもんなあ”

たつお君くんはスポーツ万能ばんのうで、頭あたまもいい。おまけに将棋しょうぎまで強つよかった。

今日きょう、昼休ひるやすみに将棋しょうぎの対戦たいせんをした。

この頃ごろ僕ぼくたちの六年一組ろくねんいちくみでは将棋しょうぎがちよつとしたブームブームになっている。

僕は将棋にはひそかに自信があつた。たつお君にも将棋でなら勝てると思つていた。ところが、全然歯が立たなかつた。完敗だつた。僕は負けたことが悔しかつた。

「あーっ！」

その時、僕は大変なことに気がついた。

たつお君の名前は漢字で書くと「龍生」だ。

将棋の駒の飛車の裏の字は「龍」だつたつけ。

僕の名前はあゆむ。漢字で「歩」と書く。

将棋の駒で「歩」は一番弱い駒だ。

なんていうことだ。僕は名前からしてたつお君に勝てっこないじゃ

ないか。

はあー。

僕は当てもなく歩いて、いつの間にかデイゴ通り商店街まで来ていた。商店街の細い筋道の向こうに「あおぞら公園」というちつぽけな公園が見えた。何気なく公園の方に近寄るとおじさんたちが何かをやっている。

将棋だ！

僕は引き寄せられるように公園に入っていた。そこには木製のテーブルをはさんで将棋をしているおじさんたちがいた。

腕組みをしながら将棋盤を見つめている人。

真剣な表情で対戦している人とその勝負を周りで見ている人。勝負
が終わって将棋の指し方を研究している人もいる。

僕は四、五人が取り囲んでいる対戦をおじさんたちの陰から見
た。

すると後ろから「君は将棋が好きなのか」と声をかけられた。

振り返ると、白髪交じりの、どことなく人のよさそうなおじさんが
立っていた。

僕は驚いて「はい、好きです」と答えた。

そのおじさんは「そうか、そうか」と嬉しそうに笑った。

「もし君が暇だったら、おじさんと将棋をしないか。おじさんも将棋

が好きなんだけど、弱過ぎて誰も相手してくれないんだよ」

僕は、将棋に対する自信を失っていたからそう言われてちよつと困った。

「ボウヤ、キンちゃんは相手がいないからちよつと相手してやってよ」

おじさんたちはそう言って笑っている。

「頼むよ」と手を合わせてまで頼まれたので、しかたなく、キンちゃんと呼ばれているおじさんと将棋をすることになった。

おじさんは確かに弱かった。おじさんは不利になると思わず「待った」をかける。

その度たびに、周りまわのおじさんたちから「待まったなし！」と厳きびしい声こえが飛とぶ。

「ちえっ、うるせーなあ。わかってるよ」

そんな時ときおじさんは、ぶつぶつ文句もんくを言いいながら、しぶしぶ「待まった」を取とり下さげた。

対戦たいせんはどっちにも勝かつチャンスがあつたけど、最後さいごは僕ぼくが勝かつた。

「なんだあ。キンちゃん、小学生しょうがくせいにも負まけたのかあ。しょうがねえなあ」

おじさんは言いい訳わけがましく「この子こが小学生しょうがくせいにしては強つよいなだよ」と言いった。

「すぐに『待まった』をする甘あまさがあるから勝かてないんだよ、キンちゃんは」

少し離すこれたところはなで将棋しょうぎを指さしているおじさんが将棋盤しょうぎばんを見つめながらみぼそりと言いった。

「いつもきついなあ、知花ちばなさんは」

キンちゃんと呼よばれているおじさんは、ぼりぼりと頭あたまをかいた。

その後ご、おじさんの名な前まえがキングさんなまえということや夜勤専門やきんせんもんのタクシーうんてんしゆの運転手うんてんしゆをしていることなどを僕ぼくは知しった。

「将棋しょうぎはさ、なんとなく人生じんせいそのものみたいだろ。だから将棋しょうぎが強つよくなれば、オレもまともな人間にんげんになれるような気きがするんだよ。」

オレはこれまで大事な時はいつも、他人のせいにして逃げてばかりいた。知花さんがオレのことを『甘い』っていうのは、確かにその通りなんだよ。

おっと、ごめんよ。こんな話は小学生にはちよつと難しすぎたなあ」

キングさんはそう言っいて、また頭あたまをかいた。

「ほら、あの人が知花さん。このあおぞら将棋クラブを作った人だ。あの人は強いぞ。あおぞら将棋クラブの中で断トツだ」

キングさんはあおぞら将棋クラブに集まっているおじさんたちのことも教えてくれた。

仕事しごとを持っていて、暇ひまな時ときだけやってくる人ひと。アキカン拾ひろいをして
生活せいかつをしていながら将棋しょうぎをすることいを生きがいにしている人ひと、
定年退職ていねんたいしよくをして朝早くからずつと将棋しょうぎをしている人ひともいる。みんな
将棋しょうぎが好きすなんだ。

「オレは、知花ちばなさんに弟子でしにしてくれって頼たのんでいるんだけど、なか
なか『うん』って言いってくれないんだ」とキングさんは言いった。

その翌日よぐじつ。

「あゆむ、知しってる？ 将棋大会しょうぎたいかいのこと」

僕ぼくは学校がっこうで友だちともから、近ちかくの児童館じどうかんで、夏休みなつやすみの最終日さいしゅうびに将棋しょうぎ

たいかい おこな
大会が行われるという話を聞いた。

「あゆむは将棋強いさあ。将棋大会に出るよ。応援するからさ」

「う、うん。どうしようかな？」

「たつお君は出るって言っていたぞ」

「えっ？」

「たつお君は『絶対、オレが優勝だ！』って自信満々だったよ」

「そ、そう」

僕は将棋大会に出ようか、それともやめようか迷っていた。

あの日から僕は時々、あおぞら将棋クラブへ行くようになった。僕

はおじさんたちからかわいがってもらっていた。いろんなおじさんと対戦した。キングさん以外のおじさんはみな強くて、僕は全く歯が立たなかった。

夏休みに入ったばかりの頃だ。

「あれっ、キングさんは？」

いつもこの時間には来ているキングさんの姿が見えなかった。

変だな、と僕は思った。

その時、「あゆむ君、ちよつと」と僕は知花さんに呼ばれた。

「実はね、ちよつとシヨツクな連絡があつたんだ。驚かないで聞いておくれよ」

ちばな はなし
知花さんの話では、キンゴさんは昨夜、タクシーの仕事中に交通
じこ お にゅういん
事故を起こして入院したということらしい。

「かなりの大けがのようで、長い期間、入院しなくてはならないよ
うなんだ」

ちばな しず くちよう
知花さんは静かな口調でそう教えてくれた。

ぼく ひと
僕はキンゴさんの、人のよさそうな、それでいてちよつと寂しそ
うな えがお おも だ むね
な笑顔を思い出して胸が「ズキン！」と痛んだ。

なつやす さいしゆうび きよう じどうかん しょうぎたいかい おこな ひ
夏休みの最終日。今日は児童館の将棋大会が行われる日だ。
しょうぎたいかい ぼく ふく にじゅうににん
将棋大会にエントリーしているのは僕を含めて二十二人いた。

たつお君はAブロック。僕はBブロックだ。

僕が勝ち進めば決勝戦でたつお君と当たることになるだろう。

「これから将棋大会、第一回戦を始めます」

いつせいに対局が始まった。

児童館の遊戯室は緊張した空気に包まれ、パチン、パチン、とい

う将棋の駒をはじく音だけが響いていた。

対局が始まって五分もしないうちに、

「オツケー。勝った！」の聲が上がった。

たつお君が勝ったようだ。

その後、しばらくして、僕も対戦相手の五年生の子に圧勝した。

にかいせん さんかいせん あつとうてき つよ
二回戦、三回戦と圧倒的な強さでたつお君は勝ち進み、決勝進出
を決めた。

ぼく
僕も、あおぞら将棋クラブのおじさんたちの教えのおかげで決勝
まで勝ち残った。

けつしょう あいて
「決勝の相手はあゆむか。これは楽勝だな」
たつお君は自信満々だ。

けつしょうせん おこな
「それでは、これより決勝戦を行います！」
せんて
先手はジャンケンで勝ったたつお君。

「よい、始め！」
くん つよ ひみつ あつとうてき こうげきりよく ひしゃ こうげきりよく
たつお君の強さの秘密は圧倒的な攻撃力だ。飛車の攻撃力を

最大限さいだいいげんに生いかした「棒銀ぼうぎん」戦法せんぽうが得意とくいだ。

僕は知花ちばなさんの言葉ことばを思い出しおもていた。

「将棋しょうぎはツキや偶然ぐうぜんを期待きたいしては絶対強ぜったいつよくなれない。強つよくなりた

いならまずまもはしっかり守かたりを固かためることだ」

僕はたつお君くんの速攻そっこうをしのぎながら、じりじりと「金きん」二枚にまいと

「銀ぎん」一枚いちまいで「王おう」を守まもる「矢倉やぐら囲がこい」で守まもりを固かためていった。

周りまわりをたくさんの人ひとが取り囲とみ、見みつめる中で決勝戦けっしょうせんは熱気ねつきを帯お

びていった。

僕はあおぞら将棋しょうぎクラブで、「歩ふ」の使つかい方かたを学まなんだ。一いち番弱ばんよわい駒こま

だけど、一いっ歩一いっ歩進ほすすめて、成なることができると「金きん」と同おなじ力ちからを持も

つ。「歩」の使い方が勝負では大事だ。

序盤はたつお君が押し気味の展開。中盤から終盤に差し掛かって、
少しづつ僕が押し返すように勝負は展開していった。

二時間以上にも及ぶ戦いの末、児童館の遊戯室に「わーっ！」と
いう歓声が上がった。

僕は初めてたつお君に勝った。

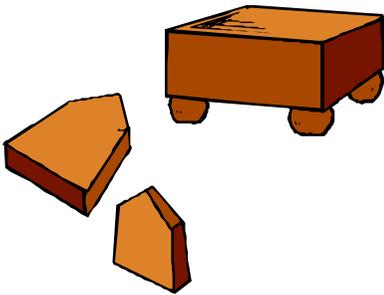
僕は将棋大会の優勝の賞状を持ってキングさんのお見舞いに行
った。

キングさんは「そうか。優勝したのか。そりや、すごいな」と僕

の優勝ゆうしょうを喜よろこんでくれた。そして「オレもさ、もうすぐ退院たいいんできそうだよ」とキングさんは嬉うれしそうに笑わらった。

僕はぼくキングさんと将棋しょうぎの対戦たいせんができることが待ち遠ましどおかった。

(もりした かずき)



「セーグワー村の星祭り」

森のはずれの草むらの中に、バツタたちの住むセーグワー村がありました。

こよいは星祭りです。特に今年の夜空は、それはそれはみごとな笑顔の夜空でした。

青い夜空に木星と金星がチカチカ光り、その下で三日月さまがにっこり笑っています。星たちは遠くで取りまいて、ヤンヤヤンヤとさんざめいています。

草むらの真ん中に、立派な土俵が作られました。星空にささげるバツタたちのお相撲大会です。

土俵を囲んでいるのは、すてきな緑色のまわしをしめたバツタたち。お客様は草むらの仲間の虫たちです。

「やっぱり、カマキリのイサトウさんが一押しですよ。あの羽を広げた姿は木村庄之助も真っ青、貫録たつぷり、うっとり見とれる立ち姿」

「いやいや、おケラのヒージャークエーさんに頼みましょう。飛ぶ、泳ぐ、もぐると、三拍子そろった優れもの」

「かえるのアタビーさんこそ、我々バツタの星祭りにふさわしい。

バツタといえはねる。はねるはかえる」

ワイワイ、ガヤガヤ大騒ぎ。星たちも思わず耳をふさいでしまいます。バツタたちは、お相撲大会の行司をだれに頼もうかで、もめていたのでした。

その時ときです。

「ならん、ならん。カマキリのイサトウも、おケラのヒージャーク
エーもならん。かえるのアタビーもならん」

セーグワー村の長老のおじいさんです。おじいさんはあまりに長

生きていたので、腰は折れ曲がり、まつ白い触角はサガリ花のように垂れ下がっていました。

「昔々の星祭りの話さあね。行司を差し違えたイサトウが、カマを振り回して大立ち回り。あな恐ろしや、恐ろしや」
バツタたちは、かまきりの鋭いカマを思い出し、ブルブル震えま
した。

「ヒージャークエーときたら、土俵にもぐって穴ぼこをあけるしま
つ。」

穴ぼこだらけの土俵なんてとんでもない。

「アタビーの大好きときたら、バツタ。こつそり長い舌でえ物探し、

土俵どひょうはアタビーあたびのよだれよだれで水みずびたし」

土俵どひょうがよだれの池いけになつたら困こまります。おまけにパツクン食たべられるなんて。

でも、どうしましょう。かみきりむしのカラジクエーはピーピーうるさいし、みのむしのフクタームシはぼろのお家うちに引きこもり、青せいどうがねのクスブンはその臭くさいこと、ぞうむしのユーナヌモーモーグワ―にいたつては困こまった時は死しんだふり。大事だいじなお相撲大会すもうたいかいの行司ぎようじなんて任せまかされません。困こまった、困こまった。

その時ときです。おじいさんが言いいました

「行司ぎょうじは、ななふしのソーロウマさんに決けつ定ていじや！」

バツタたちは不思議ふしぎに思おもいました。枯かれ枝えだのような細ほそい身からだ体ほそに細ほそい足あし、やたら小ちいさな白しろい目め。おまけにノロノロ、マツタリ。ソーロウマさんだいじに、大だい事じな行司ぎょうじがつとまるのでしようかか？

「わがセーグワー村むらの千せん年ねんもの伝でん統とうある星ほし祭まつり。千せん年ねん連れん続ぞく、横よこ綱づなはウージ畑ぼたけに住すむ殿とのさまバツタ。こよいは特とく別べつな星ほし祭まつり。他ほかのバツタたちもその知ち恵えと技わざをねつて、けつっして負まけるでないぞ！」

エイエイ、オーツ。

森もりのはずれの草くさむららに、バツタたちのおたけびが響ひびきわたります。

バツタたちのお相撲大会は順調に進んで行きました。青い夜空で
木星と金星と三日月さまと星たちが、にっこり笑ってご観戦。

さあー、いよいよ東西に分かれての勝ち抜き戦です。

東の横綱は気性が荒く、筋肉もりもりのばね足を持っている殿さま
まバツタ。他のバツタたちに勝ち目がありません。でも、知恵と勇気
と技がありますからね。

「東ー、殿さまバツター、殿さまバツター、西ー、オンブバツタ、

オンブバッター」

ハツケヨイ、ノコツタ、ノコツタ。

殿さまとのバッタがオンブバッタを「つりだし」にかかりました。軽々かるがると抱かかえて土俵どひようの外そとへ放り投げようとしたその時ときです。背せなか中なかにおんぶで隠かくれていた小ちいさなバッタが、いきなり殿さまとのバッタの顔かおに飛とびつき「張はり手て」をかましました。驚おどろいた殿さまとのバッタの足あしは、うっかり土俵どひようを割わっていました。

オンブバッタの勝かちでしょうか。いいえ、もちろん行司ぎようじのソーローウマさんはオンブバッタに厳重げんじゆうちゆうい注意ちゆういをし、反則はんそくま負けを言いい渡わたしました。

続いて、勝負をいどむのはショウリヨウバツタです。行司のソーロ
ーウマさんは、小さな白い目でショウリヨウバツタの背中をじつくり
確認しました。背中には何もおんぶしていませんでした。

ハツケヨイ、ノコツタ、ノコツタ。

殿さまバツタも、今度は慎重でした。大きな目でギロギロにらみ
つけました。筋肉モリモリのばね足を使って「けかえし」で決めてや
ろうと思いました。

けりを入れようとしたそのとたん、目の前に真っ黒いしょう油がド
ボドボ、ドボ。

なんとシヨウリヨウバツタが口からしよう油を吹きかけたのでした。
た つづ はんそく との
立て続く反則に、殿さまバツタは怒り心頭。シヨウリヨウバツタを
そらたか な と
つかんで空高く投げ飛ばしました。

けれど、投げ飛ばしたのは、行司のソーローウマさんだったのです。
なにしろ、目の前が真っ暗でしたからね。

さあ、たいへん。あまりの出来ごとに、地上のバツタたちはびつくり
ぎょうてん くち
仰天。口をあんぐり開けて夜空を見上げるだけでした。

ああ、なんと見事なのでしよう。月の黄色い光の中、クルリクル
みごと
リ、ソーローウマさんが優雅に宙返りをうちました。まるでサーカ
ゆうが ちゆうがえ
スです。そして、大歓声と拍手のうずの中、六本の細い足で、ゆらり
だいかんせい はくしゆ なか ろっぽん ほそ あし

と土俵どひょうに着地ちやくちしたのです。

さあ、いよいよ、おすもう大会たいかい、最大さいだいの見せ場みば、結びむすの一番いちばんです。
行司ぎょうじのソーローウマさんの声こえが夜空よぞらに響ひびきました。

「番数ばんすうも取り進すすみたるとところ、かたや、殿とのさまバッタ、こなたクルマバッタくろま。このすもう一番いちばんにて本日ほんじつの打ち止うちどめ」
ドラや太鼓たいこ、パーランクぱらんくの音おとが鳴り響ひびく中なか、双方そうほうの力士りきしが土俵どひょうに上あがり、ハッシはっしと激はげしくにらみ合あいました。

西にしの横綱よこづなのクルマバッタは、身体からだの大きおおきさでは殿とのさまバッタにかな
いませんが、勇気ゆうきと根性こんじょうはだれにも負まけません。この日ひのために

からだ
身体をきたえ、わざ技をねってきました。一日も休まず、千回しこを踏み、
すなば砂場で千回ジャンプ、かた硬い岩に千回蹴りと、つらいつらいけいこを重ねてき
たのです。

ハツケヨイ、ノコツタ、ノコツタ。

みごと見事な立ち合いです。あクルマバツタは頭を下げて、からだ身体のおお
との殿さまバツタの懐ふところに飛び込みました。

はげ激しい差し手争いです。お押したり引いたり、な投げを打ったり蹴り
を入れたり。手に汗にぎる大勝負になりました。

どひよう土俵の真ん中で、二人の力士は双方四つに組んだまま身動き一つし

ません。体からだじゆうから、汗あせがポタポタしたたり落おちています。

時間じかんが止とまったようでした。だれもが、シーンと息いきをこらして見守みまもっています。

行司ぎようじのソーローウマさんが、水みずを入れいようとしたその時とき、クルマバツタが満身まんしんの力ちからを込こめて「上手投うわてなげ」を打うちました。

しかし体力たいりよくでは上うえをいく殿さまバツタ。ばね足あしで土俵どひょうに踏ふん張ばり、両腕りょううでで万力まんりきのようにクルマバツタのまわしをギリギリ引ひきつけました。

そしてジリジリ、ジリジリ土俵どひょうぎわに追おいつめて、吊つりだそうとしたその瞬間しゆんかん、クルマバツタは大きく身体からだをひねって、殿さまバツタ

を土俵どひょうの外そとに放り投げほうなました。見事みごとな「うっちゃり」です。おお技わざです。

大歓声だいかんせいが上あがりました。セーグワー村むらの歴史れきしに残のこる名勝負めいししょうぶです。
全力ぜんりよくを尽つくした双方そうほうの力士りきしをほめたたえる、ドラや太鼓たいこやパーランクよぞらが夜空よぞらに鳴り響なひびきました。

森もりのはずれの草くさむらの中なかの小さな土俵どひょうを囲かこんで、セーグワー村むらの星祭ほしまつりは一晩ひとばん中じゅうつづ続つづきます。サトウキビあまの甘いジュース、草くさの葉はっぱをしぼった青汁あおじるでみんな仲良なかよく乾杯かんぱいです。

ほらっ、虫むしたちのおしやべりや笑いわら声が聞きこえるでしょう。

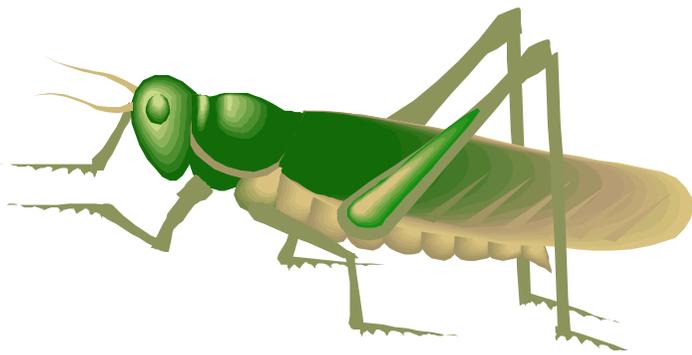
キチキチ、キチキチ、ジージー。

ジキツジキツ、ジツジツ、ツンツンツン。

ギューイ、ギューイ、ギョルルル。

青あおい夜空よぞらに、木星もくせいと金星きんせいはチカチカ光ひかり、その下したで三日月みかづきさまがに
つこり笑わらっています。星ほしたちは遠とおくで取とりまいて、ヤンヤヤンヤとさ
んざめいています。こよいは特別とくべつな星祭ほしまつりの夜よるです。

(完)



(野原
の
は
ら
せ
い
)